

フォーラム NO. 9

(購読料 2000円/年)

原子力行政を問い直す宗教者の会

発行 2004. 3. 10

事務局 茨城県那珂郡東海村石神外宿 1047

藤井 学昭 (TEL&FAX 029-282-8515)

編集 兵庫県篠山市中野 155-6

長田 浩昭 (TEL&FAX 0795-94-2740)

振込口座 10060-9-5288301

口座番号が変更になりました

原子力行政を問い直す宗教者の会

新しい事務局体制が決定

運営委員会共同代表

阿蘇敏文 (日本基督教団牧師)

東海林勤 (日本基督教団牧師/NCC 平和・核問題委員会委員)

会計・名簿管理

泉谷五十鈴 (日本基督教団)

事務局窓口

西原美香子 (NCC 幹事)

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-24 NCC内

原子力行政を問い直す宗教者の会

TEL 03-3203-0372 FAX 03-3204-9495

E-mail mclear@nifty.com

詳細は3頁の
世話人会記録です

フォーラム編集

藤井創 (日本基督教団牧師/金城学院大学)

成田小二郎 (カトリック正義と平和協議会/NCC 平和・核問題委員会委員)

渡辺峯 (YWCA/NCCチェルノブイリ災害問題プロジェクト委員)

飯田瑞穂 (NCC チェルノブイリ災害問題プロジェクト協力幹事)

鈴木晶子 (YWCA/NCC平和・核問題委員会委員)

小笠原公子 (日本基督教団/NCC 平和・核問題委員会委員長)

清水靖子 (カトリック シスター)

事務局交代に当たって

藤井 学昭

92年4月京都で、日本山妙法寺僧侶の釘宮海証師に呼びかけられ、原発現地で苦悶している僧侶牧師数人が顔を合わす機会を得た。「もんじゅ」臨界を前に緊迫した討論と、原子力が突きつける自らの宗教への問いかけに、身が引き締まる体験をしたことを思い出す。この出会いが同年10月の国への申し入れ行動となり、翌93年「原子力行政を問い直す宗教者の会」結成へと動く。そして現在を迎えることになった。

近々の原子力を取り巻く状況は、延びたとはいえ06年本格操業を目指す六ヶ所再処理工場の行方だ。これはあらゆる意味で破滅への道すがらといえよう。泥沼に陥った戦前の国の姿と重なる。これまでの道程、特に会結成後の日々は、原子力が末期産業であることの証明の年月であったと思う。もんじゅの事故から始まる、動燃爆発事故、東海村臨界事故、プルサーマル燃料の偽造、度重なる電力会社の隠蔽体質。増え続けるヒバク労働、住民ヒバクなど等。この国のどこに未来があるのだろうか。また91年の湾岸戦争以後イラクに至る戦の中で使われてきた劣化ウラン弾は、原子力産業と密接にかかわっていることも見逃せない。このような時代を生きる私たちは、この現実の課題の大きさの前に押し潰されてしまいそうだ。

個人的には、99年の臨界事故というとてもつもない出来事に遭遇し、ただたうろたえる自分があった。このような中、メンバーの呼びかけてくれる声やこの会を通して出会った人々が、どれほど私を励まし力になってくれたことであろうか。辛かったあの悲しみを共有されんと奮闘し、賛助してくださった方々に改めて御礼を申し上げたい。

それは覆い隠される悲しみに耳を澄まし、しなやかに寄り添うやさしさだった。現実を見据え、どのような状況であっても「真実に生きよ」と呼びかけてくださる声であったと思う。これこそが、この会が今まで継続されてきた力ではなからうか。

さてこのような歩みの中、何とか会が運営されてきた。組織的には非常にルーズな会であるが、行政当局や電力会社等との交渉を必ず踏まえ、確実に世話人会の開催と7回にわたる全国集会、学習会的性格のフォーラム（研究集会）。緊急の申し入れや出版を「ヒバクの悲しみ」の視点から原子力政策を問い追及してきた。目まぐるしくこの12年が過ぎ、社会的な責任も出てきたように思う。しかし、私と長田君を中心に事務局を担ったわけだが、互いの生活の繁忙と展開の限界も見てきたのも事実だ。会の解散も視野に入れ何度かの世話人会の討論の中で、事務局の任期を3年とし、東京のNCCを基点に事務局が引き継がれることになった。

武器としての原子力と再処理工場の操業というこの時にあたり、新たな展開と運動が私たちに求められている。

皆様へは今後も「原子力行政を問い直す宗教者の会」へのご協力とご支援を切にお願いして事務局交代のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

2004年3月10日



②会費制

(提案) これまでは会員が決まることで限定枠ができることを避けようと考えてきたが、会費制にすることで収入ベースを作ること、額を小額にすること、会員制を取ることで積極的な参加を期待することを目指すことにしたい。

年会費を2000円としたい。

(結論) ・期間をチェックしながら、会報発送の範囲も適宜判断しながら、以下のような会費制とする。

- ・会費1口 2,000円 年2回発行『フォーラム』を送る
購読料 2,000円 //
- カンパ大歓迎
- ・年に一度、会計報告を出す。

③六ヶ所村への平和キャラバン

(提案) 4月24日～27日までのNCC平和・核問題委員会主催の平和キャラバン、特に26日の三沢の集会に協力してほしい。

(結果) ・会としては、平和キャラバンに協賛する。

- ・宗教者の会としては、各地のフォーラム読者に、巡礼のことを知らせ、各地で何らかの取り組みを。
- ・26日を軸に、現地で集会の前に世話人会を開くなどの可能性と主催の方法については、運営委員会で検討する。
- ・東北の人たちに積極的な参加を呼びかける要素を入れる。

④全国集会

(意見) ・最後が長崎集会だった。再処理をめぐる状況は重大な時期になっている。原子力行政の転換点にきている。「2030年のエネルギー情勢についての意見・提言の募集について」(資源エネルギー庁)が、3月5日締め切りで行われている。さまざまな問題がからんでいるが、春は六ヶ所村での会を踏まえ、秋に東京で全国集会を行いたい。イラク情勢との関係もある。

- ・劣化ウラン弾の被曝の問題を含めて、秋というのはどうか。
- ・宗教者の会を10年やって、世代交代の時期。若い人たちに入ってもらいたい。
- ・戦争と原発の結びつきを明確にさせる必要がある。
- ・「宗教者」という言葉がハードルになるのなら、会のサブタイトルとして、「いのちをいとおしむ人々の集まり」というようなものを

入れてはどうか。

(結果) ・サブタイトルを含め、名前については、次回検討する。

・全国集会については、秋に東京で行う。

10月4日(月)～5日(火)

・世話人会を夏前に開く。

6月28日(月)～29日(火) 代々木で。

⑤ホームページ

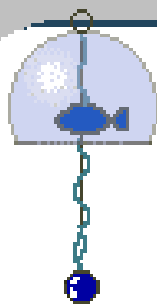
(現状) 東海事故(99年)の後、開設した。しかし無更新。当初から更新可能か、返信可能か、という不安はあった。また、政治的なサイバー攻撃も不安だったため彌光庵にPCを設置していた。

(結果) 開設するが、具体的には運営委員会で相談する。

⑥その他

・地球救出アクション97事務局から、ITER誘致の断念を求める要請あり。賛同することを決定(梅北さんより)。

・これまで、宗教者の会の名前を個々に運動の中で使ってきた。それぞれの責任で使うならよい。しかし、社会的認知が高まっているので、コアの場合は運営委員会なり世話人会の了承を得ることを確認。



宗教者の会の事務窓口となる

日本キリスト教協議会(NCC)とは?

NCCは、日本基督教団、日本聖公会、在日大韓基督教会など6教派と、日本聖書協会、日本YMCA同盟、日本YWCAなど9団体が加盟し、これに15の教会と団体が准加盟している、プロテスタントの協議体です。

福音宣教と、相互交流と、共同の社会参加のために協力し合うことを、目的としています。またこの目的のために、国内のカトリック教会など他のキリスト教グループ、諸宗教、社会団体、政府との接触の窓口になり、また他の国のキリスト教会あるいは国際的なキリスト教組織とも交わり、協力することも、大切な役目です。

内部の組織は、総務部、宣教・奉仕部、国際協力部、教育部、宗教研究所等から成っています。

「平和・核問題委員会」は宣教・奉仕部の中にあります。ここで言う「核」は、核兵器と原子力発電の両方を意味します。

真宗ブックレット

『いのちを奪う原発』が提起したこと

日本キリスト教団 東海林 勤

この書物の中の執筆者と発言者は、真宗大谷派僧侶、物理学者、医師、被爆労働者とその家族、および現地住民である。ブックレットでも中身は原発問題の基本的な認識がぎっしり詰まっている。どの文章も体を張って取り組む実践を踏まえて、力強いし読みやすい。

しかし何より本書の特徴は、原発の問題をいのちの問題ととらえ、浄土真宗の教えによって人間の現実を深く問いながら解決を目指している点にある。原発についてこれほど宗教の視点を強く打ち出した書物はまだないのではないか。あるといえば、執筆者が多分に本書と重なる『総ヒバクの危機—いのちを守りたい』（当宗教者の会編）があるが、このブックレットは前書の重要部分をさらに掘り下げたものと言える。

ひとつの教団の者が時代の要請に応じて、その教団に伝わる教えを捉え直すとき、その教団ばかりか他宗教、無宗教等すべての人に通じる真理を開示することになる。私は原発問題に関わる—キリスト者として、本書の真宗の教えにキリスト教の中心的な教えを見出す思いがする。もちろん本書が示すのはまさに真宗の教えであって、その独自性をだれも軽んじることはできない。しかしその独自の教えが今日的な課題に即して深められるとき、その主張は万人に通じる真理と

して現われる。だから他宗教の者もこの本を通して、自分が受けた教え—私にとってはイエス・キリストの教え—を捉え直し深めながら、いっそう他と協力して問題に関わるように促される。ただしこのことは本書がそうであるように、自分の教団と自分自身に対する批判—悔い改め—として起こることであろう。

1. 真宗の教え

真宗の教えは、まず長田浩昭さん（真宗大谷派法傳寺住職）の「豊かさのいけにえ—原発を認めてきた時代と私たち」に示されている。原発によって豊かな生活を楽しむ私たちの生活は「他化自在天（たけじざいてん）」、すなわち他の者が作り育てた物を奪って自らの物とし、奪われた側に目も向けず、自らが得たことだけを喜び、「有頂天（うちょうてん）」に浸る生活である。自分の「豊かさ」のために奪ったものを問わず、地元住民に癌と白血病の恐怖と現実を押し付け、35万人の労働者を被曝させながら、その現実を見ようとしなない。だから「天」を迷いと知ることもない。事故さえ起きなければよいと言って済ますところに、原発問題の本質がある。

長田さんはさらに「浄土」の教えに照らしてこの現実を問う。浄土とは、いのちの帰すべき平等の世界を表現したもの



であって、帰すべきところを明らかにすることによって、現在の生を問う原理を獲得し、未来を方向づけるものである。しかし現代人は20万年の管理を要する「死の灰」を六ヶ所村に集積し、未来の子孫に押し付けている。こうして未来を失い、いのちの帰すべきところを失い、現在を問いつける原理をも見失ってしまった。

真宗教団はこのことに対して責任がある。教団は寺檀制度により、また現世批判の原理であるはずの「極楽浄土」を死後の世界に押しやることによって、お上に無批判に従う人間を育ててきた。しかし、長田さんが関わり続けた珠洲市の反原発運動の中には、原発を過疎地の弱者に押し付ける者たちに対する怒りを全身で表わしながら、今まで原発を受け入れてきた自分の価値観と生き方を問い直す人々がいた。そういう人々の姿にこそ、親鸞が見出した浄土を願う人々の姿であったにちがいない。

もうひとり、藤井学昭さん（東海村の真宗大谷派願船寺副住職）は「ヒバク その悲しみの時代－東海村臨界被曝事故から見えてきたもの」で、JCO 臨界事故に遭った住民としての怒りと悲しみの中から、補助金に群がってきた住民の姿は親鸞の説く「鬼」－人間が人間と呼べるものでなくなったさま－であったことに気付く。しかしこの意味では原発推進者こそ、また送電線の向こうで起きていることを気にもかけない電力消費者こそ、鬼である。私たちは「鬼神に事（つか）える」ことをやめ、自他の人間を取り戻さなければならない。仏教の核心は、すべての人々と共に人間を成就したいという仏の「大悲心（だいひしん）」である。私たちは自他の悲しみを隠し、無視してきたが、人が悲しむことさえも奪われていく現実を悲しみ、怒ってどこまでも批判し、人間として生きる勇気を取り戻そう。これこそが浄土を願うということであ



『いのちを奪う原発』
2002年1月30日 第一刷発行
定価 500円 123頁
発行

真宗大谷派出版部（東本願寺出版部）
〒600-8505
京都市下京区烏丸通七条上る
TEL 075-371-9189
FAX 075-371-9211

る。東海村住民の悲しみは広島・長崎の人々の悲しみ、原発労働者、チェルノブイリの人々、将来世代の人々の悲しみとも同じである。「にんげんをかえせ」というヒバク者の声を私たちも叫び続けよう。

長田さん、藤井さんは原発に苦しみながら闘う住民の中で、たしかに親鸞に出会い、仏に会う経験をされてきたのである。

2. 事実、真実

寄せ場の労働者たちに原発労働の危険を直接訴え、また自ら被曝の危険を冒してチェルノブイリや劣化ウラン弾被災地に調査に入って世界の原発推進者と戦争屋を告発してこられた藤田祐幸さん（慶





応大学助教授・物理学)の「原子力の虚構と実像」は、まず原発の廃止と天然ガス、燃料電池、コージェネレーション・システムへの転換を提言している。これを読めば原発必要論がいかにか欺瞞であるかよくわかる。

さらに藤田さんは原発の核心的な問題、すなわち放射能問題—巨大事故、労働者被曝、放射性廃棄物の処理・処分—を論じている。巨大事故では核兵器1千発分の広域汚染が生じる。原発は寄せ場や出稼ぎの労働者を文字通り使い捨てにする。膨大な廃棄物によって我々は未来永劫子孫に対する加害者である。その上、原子力政策の中核にはプルトニウム製造技術の開発=核兵器開発がある。核の「平和利用」は軍事利用と分けられない。

同じく科学的視点からは、放射線被害の治療と被曝労働者の権利のために取り組んでこられた村田三郎さん(阪南中央病院医師)が、「ヒバク—原爆被曝、原発被曝—その差別の構造」を、労働者被曝を中心に解説している。

侵略戦争という国策の結果投下された原爆、その被害者切り捨て政策、戦後の原子力政策、その中で生み出された被曝労働者と地域住民の切り捨て政策は、共通した加害と被害の構造がある。国は原爆放射線被害の実態を過小評価し、被害を核の「平和利用」に支障のないものに見せかけてきた。この虚偽は、アメリカの核政策を支持し、非核三原則を空洞化する姿勢、さらに独自核武装の意図へとつながっていく。

被曝の健康影響に対する過小評価は、一定量以上被曝しなければ癌や白血病は

起こらないと決めてかかることで、この考え方が他の放射線被害者対策にも適用されてきた。

被曝労働者、とくに下請け労働者の実態、また放射線取り扱い作業の実態は、人間使い捨てそのものと言ってもよい。それは労働者が始めから終わりまで幾重にも安全管理や事後の治療を阻まれ、放置され消されていく構造と実態である。

以上、科学者としての藤田祐幸さん、村田三郎さんの文章は、このブックレットに欠かせない役割をもつ。仏教は人間が迷妄と虚偽を去り、真理に従うことを何より重視していると聞く。原発というものは、人間が欲望にとらわれ、他を犠牲

にしてかえりみない構造であるのに、人々はこのことを隠し、見ないようにしてきた。この虚偽を照らし出し、事実を明らかに見る科学的認識は、原発問題

解明の土台である。事実と、事実に対する人間の真実を重んじること。これなしに宗教は意味を失い、御用宗教となる。本書の宗教的発言は科学的発言によって意味深いものとなっている。

3. 人間の姿—労働者と地域住民

この書物で仏教者も科学者も訴えていることは、要するに、原発によって人間が使い捨てにされ殺されているということである。この事実が、三つのインタビュー

a. 「嶋橋美智子さんに聞く—未来ある若者たちへ—白血病で死んだ息子が残してくれたもの」(聞き手/工藤美彌子氏)、

b. 河本一也さん(仮名・元被曝労働者)、中野哲演さん(真言宗御室派明通寺住職)「事実を言い出さなければ、伝えなければ」および、





c. 塚本眞如さん（真宗大谷派圓龍寺住職）「能登半島の小さな町で起こっていること」の中で、生身の人間の現実として明らかにされている。

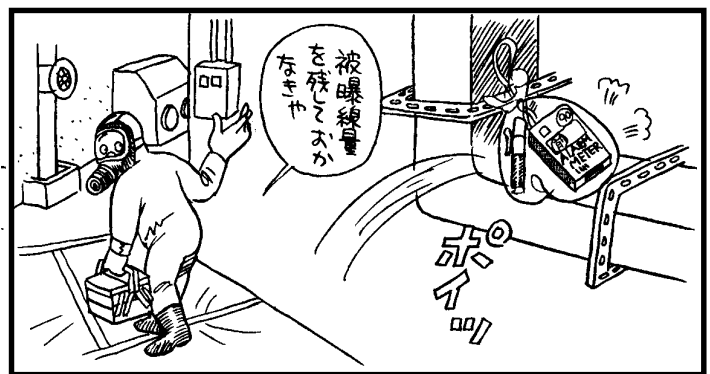
a. 嶋橋美智子さんは、ご息子の伸之さんが工業高校卒業後に浜岡原発に勤め、8年間被曝労働に従事されたが、はじめは親子とも全然危険と思わなかった。ところが伸之さんが白血病にかかると会社も病院も病気の事実を隠すので、強い疑念と怒りを覚える。とくに放射線管理手帳の中身がきわめてずさんで、改ざんの跡も見られ、息子を使えるだけ使って後は死なせるだけであったこと、労働基準監督署も早くから事実を知りながらなんの処置も取らなかったことに驚く。母親の愛情から息子の死（91年10月）の後に不正を糾すため労災認定を目指し、藤田祐幸氏の助けを得て、ついに労災を認めさせる。

原発があるかぎり、たくさんの労働者が犠牲にされる。未来ある若者が犠牲にならないようにと心から願い、嶋橋さんは今も訴え続けておられる。

b. 河本さんは、原発労働者が確実に被曝し、「とられる」（業界用語。癌などで死ぬこと）実態を具体的に、克明に語っておられる。末端の事業所は危険を知っていてやらせるし、労働者も仕事ほしさに現場監督に被曝を隠すことさえある。それもこれもこの仕事で生き残るためという、蟻地獄のような実態。上層部は見えていないからこれでいいと思っている。とくに放射線管理手帳の制度は被曝労働者を使い捨てる仕組みである。

中島さんは、その放管手帳を持って働いた実質35万人の犠牲の上に作られる電気を、1億2千万人の国民が「そんなこと知らぬ、存ぜぬ」で食ってきた、その構造悪を指摘する。河本さんは、その35万人の一人として、僕らなしに電気は使えないのだというプライドを強調する。何気なく電気を使っている人は、その人のために僕たちが原発に入って被曝しながら一生懸命働いていることを分かってほしいと訴える。プライドは尊敬すべき職人のプライドだが、犠牲を強いられた者の、泣きながらの尊厳の訴えのように聞こえる。

河本さんと中島さんはまた、それぞれ被曝労働者と地元住民として、この両者が共に被曝者と見做されて差別される状況を語る。放射能公害は他の公害と違って遺伝子に刻印される陰湿なものだから、差別も陰湿である。もし大事故が起これば、若狭はあつという間に被差別地帯になるだろう。そうでなくても被曝は現実には起こっているのに、そのことは表に出しにくい。しかも被曝を蒙る労働者と周辺住民が、被曝という理由で対峙させられる。県外から来た労働者は地元の女性との結婚を避けたがる。被曝者同士が結婚すれば結果は悲惨だよと



本書68頁挿絵より

言われるからである。もっと深刻なのは、この頃発電所で働く若者たちが、どうせ原発でないと暮らせないと行って、地元の好きな女性と結婚することである。地元の女性も親も、関電の正社員ならエリートだからと大歓迎である。それで地元の男性は独身者が多い。原発は人々を限りなく分断する。

被曝の現実や差別に関することはなかなか言いにくいけれど、このままでは被曝と差別の中にまったく閉じ込められてしまうだろう。現実はこちらまで来ているのだから、「とにかく事実を言い出さなければいけないんです」。

c. 塚本真如さんは、珠洲の住民が原発計画に振り回されてきた様子を語る。原発誘致が冗談のような話から始まって、放射能は「人体に影響がない」を合言葉に推進されたが、その背後には、国の農政に追い詰められて土建業に頼るほかないので、仕事をもらうために原発に反対できないという、住民の苦境があった。多少危険でも原発が来れば子や孫にも仕事ができる家族といっしょに暮らせるかもしれない、あるいは都会に出て行った子どもの所で世話になるにも、わずかでも金を持っていけば少しは優遇されるかもしれないという思いになる。その上国策だといわれれば反対しにくい。あの手この手の買収と懐柔。それでも同意しなければ猛烈な嫌がらせやいじめ、分断の攻勢。

塚本さんは幼いときから父親に、真宗門徒は強い者の味方をしたらダメだと聞かされてきた。原発のことがまだ分からなかった頃、「原発立地の女の人が結婚して子どもを身ごもっているのだけど、その子を産もうか産むまいか迷っているという話を聞いて、原子力ってそういう問題なんだというのが、ものすごく

ショックやったんや。そのことがずっと頭にあって、忘れられないんよ。そのことと、体制に反対するという性格が、僕に火をつけたという感じがあるね」。都会の人は電気のスイッチを入れるとき、ちょっとでも若狭や志賀町の人たちを思い浮かべてほしい。彼らは追い込まれ、追い込まれて、ハンコを押してしまったのだ。都会の「その明るさは、彼らのくやしさと涙だと思っしてほしい」と訴える。

珠洲は先ごろついに関電が建設を断念したが、町や人心に深い傷を残したのではないか。まして全国の原発の地元は、中嶋さん河本さん、塚本さんが語った事情がさらに深刻になっているのだろう。私たち都会の者はそのことに気がつきもしない。少しは事情を聞いても、あの人たちもお金には弱いしねという感じで聞き流す。誰にとっても当然な幸せへの願いが地元の人には許されないということが分からない。中嶋さんが「若狭の住民から見れば、大都市圏の電力需要のために若狭に15基もの原発を立地させたそれ自体が差別そのものだ」といわれるのを、私たちは頭では認めても、生活感覚ではひとつごとのように感じて認めようとしなない。労働者が私たちに電気を供給するために被曝し殺されてもそれもひとつごとである。それほどに、私たちが鬼である。そして今や核のごみはたまり、大事故は迫り、核武装も権力者の視野にある。私たち都会の市民が、核による加害者であり被害者である。

鬼の文明を脱して人間の文明—すべての人が他を犠牲にすることなく、みな共に生きる世界—を目指すために、原発被曝者の姿に目を凝らし、原発廃止に取り組みながら、自分たちの心と生活を変えていかなければならない。





お知らせ

NCC平和キャラバン2004 六ヶ所村へ
—国際平和巡礼の皆さんと
共に歩き、祈る—

詳細は別紙参照

- ▼ 主催：NCC平和・核問題委員会
- ▼ 協賛：原子力行政を問い直す宗教者の会
- ▼ 日程：2004年4月24日（土）～27日（火） 3泊4日
- ▼ 行先：青森県六ヶ所村、三沢
- ▼ 定員：15名

NCC（日本キリスト教協議会）平和・核問題委員会は、平和をつくる活動をしている全国各地の人びとと出会い、地域の抱える問題を学び、地元の運動と協力、連帯を模索しようと、毎年「平和キャラバン」を行っています。

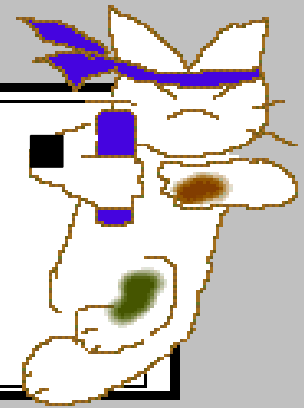
2004年の平和キャラバンは、4月26日のチェルノブイリの日、六ヶ所村に立とうと企画しました。六ヶ所村に立って、原発、核燃料サイクルの問題と私たちの生活をもう一度見直してみませんか！？

このとき、国際平和巡礼の皆さんが六ヶ所村を訪れます。国際巡礼は、ウランを掘っているオーストラリアからそれを燃料として使う日本へ向けて、ウラニウムに始まる原子力産業から離れ、核も戦争も暴力もない、いのちあふれる地球を子どもたちへ残そうと手渡そうという願いをもって行進するプログラムです。この巡礼に賛同し、世界中から集まった人たちが、およそ9ヶ月かけてオーストラリアと日本およそ5000KMの道のりを、「核」に関わる現場を通りながら現在の地球のありさまを学び、人びととの出会いの中で新しい道を探ろうと、広島、長崎にむけて、行進します。NCC平和キャラバンも、六ヶ所村で、国際平和巡礼に合流する計画です。

また、26日には、原子力行政を問い直す宗教者の会と協力し、三沢にて祈りの集会「平和を祈念する宗教の集い—核のない世界を願って」を開催します。この集会のみ参加も大歓迎です。

どうぞ、六ヶ所村へのNCC平和キャラバンにご参加ください。

参加のお願い



■ 平和を祈念する宗教者の集い —核のない平和な世界を願って—

共催：原子力行政を問い直す宗教者の会
NCC平和・核問題委員会

日時 4月26日(月) 16:00~19:30(受付15:30~)
会場 日本基督教団大三沢教会
参加費 1200円(夕食含む)
問い合わせは宗教者の会事務局窓口(西原)まで

プログラム

- 16:00 あいさつ 原子力行政を問い直す会世話人
16:05 お話 山田清彦さん(核燃阻止一万人訴訟原告団) —交渉中
核燃料サイクルの問題と六ヶ所村の現状、反対運動の状況など
についてご報告いただきます。
17:15 祈り
宗教を超えて、「核」のない世界を祈ります。
18:00 交流会(夕食を囲みながら)
「核」はいらないと、地域で活動する方々、また宗派や教派を
超えて宗教者たちのネットワークを広げましょう。
19:30 終了

あとがき

★十年を振り返ると、功罪含めて、大谷派的発想と行動スタイルで運営をしたのだと思います。その「大谷派的…」とは、①差別の課題として問題をねちっこく考える(会議が長い!?) ②学習会と本作りが得意 ③組織運営のルーズさ(大らかさ?) ④最後は酒で本音を語り合う等々。

★それらによる十年の歩みは否定はしません。ヒバクの問題を根源的な問題として提起してきたことは確かな歩みであったと実感しています。しかし原発をめぐる状況は、この「大谷派的…」なものの限界が見えたことも事実だと思います。①に対しては、現在の戦争につながる問題として、明確に位置づけること、②に対しては、軽やかに行動にという側面を強める必要があること。

★またこの十年間で、会は教派宗派の壁を飛び越え、全国に顔の見えるネットワークを形成しました。それは同時に社会的責任が発生し、煩雑な事務作業をこなさねばならなくなったのです。しかし、③の「大谷派的…」なものではこれも対応の限界にきたことと、それをこなしていくことを藤井・長田のそれぞれの状況が許さなくなってきました。④については論評を避けよう。

★そういう現状の中で事務局がNCCにうつることによって、国際的な視野が広がることや、学習で終わらない行動実践を期待しています。そのことによって、原発とそれを推進するこの国の現実を問い直し、終止符をうたせるための具体的な歩みとなることを願います。

★旧事務局は世話人として今後も深く会に関わり続けます。十年間、ありがとうございました。

★会計報告は次号に掲載します。(長田)